

# クロームブックを活用した連歌創作の授業

## 「水無瀬三吟百韻」の鑑賞から創作へ

福岡県立北筑高等学校 黒岩 淳あつし

### はじめに

連歌は面白い注1。その連歌という日本の伝統文芸の面白さを生徒に実感させたいと思い、今までに何度か授業を行ってきた注2。その際、「水無瀬三吟百韻」の鑑賞をした上で、創作をさせるということが多かった。創作時は、あらかじめ生徒に小短冊型の用紙を数枚配布していた。教室を一座に見立てて、句を思いついた者は、その用紙に記入し提出する。その中から宗匠役の教員が、句を選び採択をしていくという方法であった。この方法は、集めるのに手間がかかり、時間がかかるのが難点であった。令和五年、勤務校でもクロームブックを生徒全員に持たせることになった。プリントを使わずに句を提出し、それを教室で共有しながら連歌創作を進めることが可能になったのである。本稿は、その実践報告である注3。

### 一 クロームブックを活用する利点

クロームブックを活用する利点は何か。授業をする前、次のように考えた。

- (1) 気軽に句を提出でき、創作しやすい。
- (2) 提出された句を皆で鑑賞できる。
- (3) 時間の節約で句作が次々と進む。

### 二 目標と計画

#### (指導目標)

- 1 連歌の特質を理解させる。
- 2 句を付ける楽しさを実感させる。
- 3 文語文法の理解を深めさせる。

#### (指導計画)

- 第一次 「水無瀬三吟百韻」の鑑賞 (一時間)
- 第二次 付句創作 (一時間)
- 第三次 班別創作 (三時間)
- 第四次 手直し (一時間)
- 第五次 発表・振り返り (二時間)

### 三 授業実践

#### (二時間目)

- 1 表八句をノートに書写させる。

#### 水無瀬三吟百韻

発句	雪ながら山本かすむ夕べかな	宗祇	春
脇句	行く水とほく梅にほふ里	肖	柏春
三	川風に一むら柳春見えて	宗長	春
四	舟さす音もしるき明けがた	祇	雑
五	月や猶霧渡る夜に残るらん	柏	秋
六	霜おく野はら秋は暮れけり	長	秋
七	鳴く虫の心ともなく草枯れて	祇	秋
八	垣根をとへばあらはなる道	柏	雑

#### 2 「水無瀬三吟百韻」の鑑賞。

季節の句と、そうではない雑雑の句があることを伝え、「水無瀬三吟百韻」の表八句はそれぞれどうなっているか考えさせる。発句の「雪ながら山もとかすむ夕べかな」は、雪があるので、冬の句としてしまいがちであるが、「かすむ」という春の季語に重点があり春の句となる。季語の確認後、季節に関する式目(ルール)を示す。

春・秋の句 三句～五句  
夏・冬の句 一句～三句

七句去り(間を七句あけないと同じ季節を詠むことはできない)

それぞれの句について、季語を確認した後、助動詞や古語の意味をふまえて、内容を確認し、鑑賞する。

### (二時間目)

初折裏第一、二句の説明と付句の創作(注4)  
表八句の続きの句(初折裏)を紹介する。

- 一 山深き里や嵐に送るらん 長雑
- 二 慣れぬ住居ぞ寂しさもつき 祇雑

第三句を付けるよう指示。その際、季節の式目にしたがうと、初折表七で秋の句が詠まれており、その後七句去っていないので、秋の句は詠めないことを確認する。

ここで、あらかじめ用意しておいたグーグルフォームに入力させた。回答は、出席番号を選択式にし(非表示)、「付句を作りなさい」という「課題」に記述式で回答させた。

黒板の半分をスクリーンにしておき、生徒が送信した付句をスプレッドシートに映し出すようにしておいた。最初はなかなか送信する生徒が出なかったが、しばらくすると次々と送信し始めた。出席番号は非表示なので、誰の作品かは分からない。

### 【生徒の付句一覧】

2	2023/02/20 12:10:21	あたらしき 出金い人待つ 時分かな
3	2023/02/20 12:14:42	夜に灯る 螢の光 ただ一つ
4	2023/02/20 12:15:19	知らぬ間に 日が燃え移り 大火事で
5	2023/02/20 12:15:33	君を待つ 寒さも忘れ ひたすらに
6	2023/02/20 12:15:34	夕暮れの身を知る雨よ我ひとり
7	2023/02/20 12:16:42	雨蛙仲間と共に鳴り響き
8	2023/02/20 12:17:17	父母おらず 一人ただ見る 臘月
9	2023/02/20 12:18:10	思うほど 外も心も 五月雨
10	2023/02/20 12:18:11	誰も居ぬ部屋 静かなりけり
11	2023/02/20 12:18:16	桜舞い 一人寂しく 陽にあたる
12	2023/02/20 12:18:21	会いたくも 歳が故に 遠き友
13	2023/02/20 12:18:22	星空を 見上げて 故郷 思い出す
14	2023/02/20 12:18:30	鶯の 鳴く声響く 部屋の中
15	2023/02/20 12:18:34	待ち続け 気づいたときには 大晦日
16	2023/02/20 12:18:52	寂しさに 心に残る 初雪よ
17	2023/02/20 12:18:55	我支え 癒やしの花が ただ一つ
18	2023/02/20 12:19:14	早朝に 呼び出す母の 声もなし
19	2023/02/20 12:19:48	外見うらば 行く人多し 我ひとり
20	2023/02/20 12:22:29	炭窯を 囲んで話す 友はなき
21	2023/02/20 12:22:39	窓の外 ただ鳥の声 あるのみや
22	2023/02/20 12:24:48	思いだけは 待てど変わらぬ
23	2023/02/20 12:24:54	黒がしておくれや 我が恋心

約二十句集まったところで、幾つかの句にコメントしながら、そのうちの一句

### 三 君を待つ寒さも忘れひたすらに 冬

を採択することにした。恋句である。前句と合わせてみると、寒い中、慣れぬ住まいで恋人を待っている状況を表すことになる。この句に付けて、第四句を創作するように指示。冬の句を続けてもいいし、雑の句でもよい。積極的に作って送信するように呼び掛ける。約二十句、スプレッドシートに映し出された。遅れてもいいので、その日のうちに一人一句は提出するように指示しておいた。

### (三時間目)

前回時の作品をプリントに整理し配付・鑑賞

第四句は、

四 この恋心内に秘めたり 雑

を採択し、この後、四人の班に分けて、各班スライドを使って創作させた。その際季節の句に関する式目を守るよう指示した。

### (四～五時間目)

班別創作の続き

作品は、初折裏十四句まで続けることを目標にした。第十三の「花の定座」では桜をイメージして「花」を詠むことや、「花の句」は春句となるので、逆算して七句前以降は春句を詠めないことなどを説明した。

### (六時間目)

作品の手直し・発表原稿作成

各班の生徒作品について、次のような点を示して手直しさせた。

- ・ 同じ言葉を使っていないか。
- ・ 花の句は、桜をイメージしているか。
- ・ 季語は、季節の式目に合っているか。
- ・ 文法的な間違いはないか。

※発句以外「かな」は使えない。

次回発表してもらうことを予告し、発表原稿を作成させた。次に示すのはA班の作品。

- 五 他の事も考へ事も蚊帳の外 快夏
- 六 鳴く蟬の音も遠くに聞こゆ 鈴菜夏
- 七 外に出て耳をすませば夏感す 駿典夏
- 八 きみ覚ゆるかあひ見し景色 侑紗雑

九	名月や忘るるなかれ沈めども	快秋
十	吾妹を思ふこの星月夜	鈴菜秋
十一	朝起きて霧がかかるや空見えず	駿典秋
十二	気持ち届かずものを思へり	侑紗雜
十三	花に問ふ咲くか咲かぬか我の夢	快春
十四	鳴かぬ鶯ただ待ちわぶる	鈴菜春

(七時間目)

各班の発表

黒板の左半分のスクリーンに作品を映し出し、班員四人は前に立って工夫した点などを説明。他の生徒は、自分のクロームブックを見ながら聞くこともできる。十班が、約五十分で発表し終わった。

発表後、「連歌創作」の振り返りを、用意しておいたグループフォームに入力させた。授業中は時間が取れなかつたので、宿題とした。項目は以下のとおりである。

- 1 自分が作った句で最も気に入った句を、前句と共に書きなさい。
- 2 どのような点が気に入ったのか。
- 3 その他の句で気に入った句を、前句と共に書きなさい。
- 4 どのような点が気に入ったのか。
- 5 連歌を創作してみたの感想。

【生徒の発表スライド】

四 生徒の記述

2-4 連歌創作C班 (吉川大輝 ●徳本衣咲 田中美月 大場蒼太)

三四五六七八九十	君を待つ寒さにも忘れひすらに	典加冬	衣咲夏	大輝夏	美大秋	蒼太秋	太月秋	輝月春	衣咲春	大輝春
四五	この恋心内秘めたり	典加	衣咲	大輝	美大	蒼太	太月	輝月	衣咲	大輝
六	あなたで	典加	衣咲	大輝	美大	蒼太	太月	輝月	衣咲	大輝
七	団扇姿を	典加	衣咲	大輝	美大	蒼太	太月	輝月	衣咲	大輝
八	霧起き	典加	衣咲	大輝	美大	蒼太	太月	輝月	衣咲	大輝
九	紅冷宴	典加	衣咲	大輝	美大	蒼太	太月	輝月	衣咲	大輝
十	花	典加	衣咲	大輝	美大	蒼太	太月	輝月	衣咲	大輝

3 (前句) 歌よみ鳥の鳴く声聞こゆ  
 楽しんで桃色の花踊りたり  
 桜の花びらが舞っている様子を見て表現しているところがいいなと思った。さらに、前句で鳥が鳴いていることから、鳥の歌声に花びらが踊っているとも解釈できて面白いなと思った。(K・H)

(感想)

・季語を変えるタイミングや前の句にひっぱられない句を考えるのが難しかった。短歌や俳句は考えた事はあったが、連歌は初めてだったので、新鮮で楽しかった。(K・W)

・内容が被らないようにすることが難しいと思いましたが。同じお題の句からスタートしても、どのグループも句の内容が違って発想が面白いと思う場面が何度もありました。一人で短歌を作るよりも何人かで連歌を作ったほうが楽しいなと思いました。(A・S)

・歌を詠むという活動は今まで何度かあったけれど、二人でひとつの歌を詠むというのは初めてで、前後の組み合わせによってその歌の印象が全く変わってくるのがとても面白いなと思った。まだ文語にするのができていなかったり文法的に間違っていたりする点もあったが、またやる機会があったらもっと上手く作りたいと思った。(A・Y)

・俳句や短歌一つだけの創作ならしたことがあったが、みんなで歌をつなげていく連歌はやったことがなく新鮮で楽しかった。また、連歌にもいろいろな決まりがあつて奥が深いなと思いました。(D・Y)

・意外と深く考えすぎて難しかった。いろいろ考えながらするのが新鮮で俳句や短歌を作るよりも時間がかかった。けど楽しかった。(M・F)

・みんなと物語を協力して作ることで絆が深まったと思う。(Y・Y)

・他の人が考えた句をつなげるのはとても難しかったが全て完成した時の達成感がとてもよかった。(R・T)

生徒の記述を読むと、最初は難しく感じたが、続けているうちに楽しくなってきたという感想が多かった。

## 五 グーグルクロームを使用してよかった点

事前に予想していたように、生徒は句を出しやすかったようである。また、班別の創作も画面が共有できるので、作業しやすかったとも思われる。

グーグルスライドでは、時間をかけて推敲できるということも利点であると感じた。推敲した画面が保存されるし、授業後、教室外でも作業を進めることができる。

また、生徒作品等をプリントにまとめる際、教員はスプレッドシートやスライドをコピーすればいいので、手間がかからない。

## 六 課題

生徒の感想に「前の句に引っぱられない句を考えるのが難しかった」とあるように、生徒はついつい前の句と同じような言葉を使用したり、同じような発想を続けたりしてしまいがちであ

る。連歌は前に戻らず、新しい内容を次々に展開していくことが大切であることは、何度も強調しておきたい。

班別活動にすると、授業中は同時に生徒の句を検討できない。授業が終わるたびに、教員側でチェックして、次の時間に指示する箇所を整理しておく必要がある。

## 終わりに

連歌の面白さは、実作することで実感することができるといえる。友達の句と自分の句が重なっていくことは、心がつながっていくようで楽しいはずだ。また、実作することで、鑑賞する力もついていくと思う。季語への理解も深まるし、あえて文語で作らせることで、文語文法への理解も深まるであろう。

そして、今回、一人一台端末の活用は、連歌創作において効果的であることが実感できた。他の会場との交流も視野に入れて、よりよい授業方法を考えていきたい。

## 注

1 拙著『連歌を楽しむ―鑑賞と創作入門―』（淡水社・二〇二〇年八月）に連歌の面白さ、楽しさについてまとめた。また、現代の連歌については、「現代の連歌―福岡県行橋市須佐神社今井祇園連歌の会―」（数研国語通信「つれづれ」一七号・二〇一〇年四月）、『連歌の息吹―つながり、ひろがる現代の連歌―』（淡

水社・二〇一六年八月）で報告した。

2 拙著『連歌と国語教育―座の文学の魅力とその可能性―』（淡水社・二〇一二年八月）、拙稿「連歌『水無瀬三吟百韻』表八句の教材化―連歌の鑑賞から創作へ―」（数研国語通信「つれづれ」二九号・二〇一六年五月）、「心と言葉をつなげる連歌創作指導」（国語教育研究）第五七号（広島大学教育学部国語教育会・二〇一六年三月）、「高校における連歌の授業」（『西日本国語国文学』第五号（西日本国語国文学会・二〇一八年十月）、「古典教育に活かす連歌の文学性―中世に隆盛を極めた連歌の本質的な面白さに迫るために―」（『国文学叢』第二四五号（広島大学国語国文学会・二〇二〇年三月）などに報告。

3 令和五年三月に福岡県立北筑高等学校で行った。対象は二年生文系クラス四十名（男子二十名・女子二十名）。古典Bの時間。新課程の「古典探究」においては、言語活動例として「古典を読み、その言葉や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動」が示されている。

4 連歌は百韻を基本とする。正式には、四枚の懐紙を用い、それぞれ半折にし、表裏に書き記していく。最初の紙を初折と言いい、表に八句書き、続きは裏に十四句書く。二枚目、三枚目は表裏それぞれ十四句ずつ、そして四枚目の紙は名残折と言いい、表に十四句、裏に八句書く。